

---

# 紀 要

---

## 高田藩「絵図書」と増田桂堂について

花岡 公貴

### はじめに

上越市立歴史博物館では、令和2年度から令和3年度にかけ、2度にわたって旧高田藩士増田家から史料の寄贈を受けた。

寄贈されたのは、幕末から明治の初めまで活動した高田藩士で、絵師・画人として知られる増田桂堂による掛軸2幅と、延享元年（1744）の年紀がある高田城外郭内部の堀・土塁を描き間尺を記入した「高田城見取図」、増田家の家譜4点を含む、372点の資料群である<sup>1</sup>。この資料群をここでは「増田桂堂資料」と呼称することにする。

上記の資料以外、ほとんどが日本画の模写や習作あるいは下絵、そして著名な近世絵師の署名落款の精密な写しなど美術資料によって構成されるが、ごく少数ながら長州戦争における陣中での指示を伝える書状が含まれている。

資料群のなかで大部分を占める美術資料については、美術史の立場からの分析を待つこととし、本稿では藩士としての増田桂堂について、家譜を中心に分析を行い、桂堂の履歴を明らかにするとともに、僅かに残された長州戦争関係の史料から高田藩における「絵図書」の職務について考察するものとする。

### 1 絵師・画人 増田桂堂

増田桂堂に関する研究は少ない上、いずれも簡単な桂堂の略歴と絵師・画人としての紹介にとどまる。

例えば、『高田市史』では、「増田桂堂は、代々絵図師として榊原氏に仕えた。市ノ橋に住んでいた。通称は茂左衛門、椿椿山に絵を学び、花鳥は椿山よりうまいとの評もあった。明治五年死亡。子の春岳も絵がうまかった。八年に信濃安曇郡に移住した。」とある<sup>2</sup>。また、図録『久比岐野画人展』では、「六石式人扶持の高田榊原藩士で、藩のお抱え絵師として市ノ橋に住む、増田家は代々絵図師として活躍し、桂堂は椿椿山について絵を学び、花鳥画を得意とした」と、禄高を明らかにするがそれ以外の情報は『高田市史』を踏襲する形となっている<sup>3</sup>。さらに、『越佐書画名鑑』では、文化7年（1810）生まれ、明治8年（1875）没であることを明記したほかは、『高田市史』及び『久比岐野画人展』の記述を踏襲している<sup>4</sup>。

まとめると、桂堂は文化7年（1810）に生まれ、大名榊原家家中において切符取6石2人

<sup>1</sup> 資料群は仮整理の状態であり、数量は今後の整理により変わる場合がある。

<sup>2</sup> 『高田市史』第1巻、238ページ（高田市役所、1958年）

<sup>3</sup> 特別展図録『久比岐野画人展～地元で活躍した美の先駆者たち～』（上越市立総合博物館、1999年）

<sup>4</sup> 荒木常能編『越佐書画名鑑』第二版（新潟県美術商組合、2002年）

扶持で代々絵図師を勤める増田家の人物で、通称茂左衛門を名乗り、絵を椿椿山に学び、明治8年（1875）に死去した。子は春岳といい、明治8年に長野県安曇郡へ移住した、ということになる。

高田藩士増田桂堂についてはもちろんのこと、著名であった絵師・画人としての桂堂の情報も極めて少ないことが分かる。

そこで、はじめに榊神社が所蔵する「卒家譜」によって増田桂堂に関する基本的な情報を押さえておくことにしよう<sup>5</sup>。職歴部分には後で参照する増田家の「家譜」と重複する部分も多いのでここでは省略する。

史料1 「卒家譜」より増田八十治・桂堂（抜粋）

○記

増田桂堂源信良嫡子

一、高六石貳人扶持 増田八十治源善  
午歳拾六歳

一、長屋龍之部第五区

一、安政五年戊午五月十五日謁見仕候

一、明治元年戊辰十一月廿一日父願ニ依テ番代被拜命候

一、明治三年庚午九月十三日父願ニ依テ家督被拜命候

（八十治職歴部分省略）

増田武左衛門源信尹養子

実新倉作兵衛源高利甥

父 増田桂堂源信良  
午六拾三歳

一、文政四年辛巳十二月廿六日謁見仕候

一、天保三年壬辰十月廿九日家督無相違下賜之所、家業未熟ニ付貳石被召上四石貳人扶持被下賜候、天保七年丙辰三月廿七日家業全成ニ付貳石返給被下賜候

（桂堂職歴部分省略）

一、天保四年癸巳六月三日旧名文作改父之名武左衛門ト改名願之通被許名候

一、明治三年庚午十月十一日旧名武左衛門、桂堂ト改名願之通被許命候

右之通ニ御座候

明治三年庚午十二月 増田八十治

明治4年（1871）に藩によって編纂された「士家譜・卒家譜」は父子2代のみを収録の対象にしている。「家譜」の前半に記載された八十治について見てみよう。八十治は桂堂の嫡子で姓は増田、字（あざな〈通称〉）は八十治、本姓は源で、諱（いみな〈本名〉）は善である。午年（明治3年〈1870〉）には16歳だった。家禄は6石2人扶持、住所は長屋龍之部第五区。明治元年（1868）に父武左衛門（桂堂）と番代（職務を代行すること）、明治3年（1870）

<sup>5</sup> 「卒家譜」十二 ま（榊神社所蔵）

9月13日には家督を相続しており、「家譜」提出の明治3年12月時点で八十治は増田家当主であった。

つぎに桂堂の部分を見ると、姓は増田、字（通称）は桂堂、本姓は源、諱（本名）は信良である。桂堂の実叔父は新倉作兵衛で、増田武左衛門信尹へ養子に迎えられ、家督を相続していることがわかる。新倉作兵衛は天保15年（1844）「高田御家中高分限帳」には「十石二人扶持 上番 新倉作兵衛」と名前が見える<sup>6</sup>。

桂堂は午年（明治3年<1870>）に数えて63歳というので、生まれ年は文化5年（1808）になろう。文政4年（1821）には初御目見えを果たし、天保3年（1832）には家督相続したものの、「家業未熟」として6石2人扶持の家禄のうち2石を召し上げられ、天保7年（1836）には「家業全成」となり本禄に復されている。天保4年（1833）には、字であった文作を父信尹と同じ武左衛門に改名し、さらに明治3年（1870）10月11日には武左衛門から桂堂へと改名を果たしている。

こうしてみると、増田桂堂が「桂堂」を名乗るのは明治3年（1870）10月以降のこととなる。同年9月に八十治へ家督を譲っていることから、桂堂は隠居を機に正式に桂堂を名乗ったと考えることが出来る。増田家当主として藩に出仕した期間は「武左衛門」だったことになる。この武左衛門という名は、桂堂の父である信尹もまた武左衛門を名乗っていたように、増田家が代々世襲する通称であった。増田家には「家業」があり、武左衛門（桂堂）が家督相続した際には、「家業未熟」として禄の一部を召し上げられている。家業が未熟であるため禄の一部を召し上げられるということは、増田家がこの「家業」を以て榊原家に出仕しているということである。藩士増田家の「家業」については、次節以降でふれていく。

さて、大正2年（1913）に財団法人榊原慈善団が作成した「高田藩士族名簿」によれば、八十治について「増田八十治泰岳」と記載され、脇に「泰岳ト定ム」とある。『高田市史』が「春岳」としたのは八十治泰岳のことであろう<sup>7</sup>。

## 2 増田家の系譜と家業「絵図書」

### （1）増田家の「家譜」

寄贈を受けた「家譜」は4点である。便宜的にこれに①～④までの符号を付すことにする。

①～④はいずれも、半紙を縦折にしてこよりで二つ目あるいは四つ目に綴じ、簡便ながら縦帳の形式をとる。④を除いて表紙の中央に「家譜」とあり、左下にそれぞれ①「増田武左衛門」、②「増田桂堂」、③「増田八十治」と氏名が書かれる。①～③の「家譜」の内容がこれらの人物の履歴であることがわかる。3点のうち②「増田桂堂」と③「増田八十治」の「家譜」の表紙には、右中央に「書出候扣也」と記されていること、また、文末にはいずれも明

<sup>6</sup> 「榊原様内越後頸城郡高田御家中高分限帳」天保十五年一月（大島良一氏所蔵、上越市史専門委員会近世史部会編『上越市史叢書 史料集・高田の家臣団』上越市2000年、所収）

<sup>7</sup> 「高田藩士族名簿」第七号 クヤマ（榊神社所蔵）

治2年（1869）12月7日付けで、それぞれの作成者である「増田桂堂」及び「増田八十治」の名と、宛所である「史監御中」の記載があり、藩へ提出された「家譜」の扣であることがわかる。先述したように、武左衛門が正式に藩主の許しを得て桂堂へ改名するのは明治3年（1870）10月のことなので、明治2年（1869）12月の日付を持つ「家譜」に桂堂の名が用いられるのは不自然であるが、これ以前から号として桂堂を用いていた可能性を指摘しておきたい。

この家譜提出の成果は明治4年（1871）に先述の「士家譜」「卒家譜」としてまとめられ、榊神社に現存している。家中の各々が提出した「家譜」の用語の統一や、記事の精粗の均一化のため、何度も修正が命じられたものと見え、増田家に伝存した「家譜」の扣と一致しない部分も多い。

①については、表紙には「扣」の記載がないものの、文末には「嘉永三庚午年五月廿六日 増田武左衛門 御書物役中 右差出候扣也、外好身書一同納」と記載され、これもやはり藩に提出された「家譜」の扣であることがわかる。高田藩では享保年間（1716～1736）、安永年間（1772～1781）に家中の「先祖書」編纂を行い、以後は明治4年「士家譜」「卒家譜」を待つことになるが、嘉永年間（1848～1854）にも編纂が計画された可能性がある。

④のみ表紙の左に寄せて「先祖書」と書いたのちにそれを消して「家譜」と直し、その下に「増田信良書之」と記される。信良が桂堂の諱であることはすでに述べた。この家譜は、桂堂のみでなく、桂堂の祖父信久と父信尹、そして桂堂の履歴についても合わせて記載されることが①②③と異なる。全体に加除が多く、終筆も「一、安政四年」と記載してそれ以下の記入がなく書きかけであるように思われ、桂堂の覚書の要素が強いように見える。

まとめると、①は嘉永3年（1850）に武左衛門（桂堂）によって書物役に提出された先祖書の扣。②③は明治2年（1869）12月に史監に宛てて提出された、桂堂及び八十治それぞれの履歴を記した「家譜」の扣。④については①から③の作成の下敷きとなった武左衛門（桂堂）の覚書ということができよう。

以上、増田家の「家譜」4点について、その史料上の性格について概略を整理してきた。少し前置きが長くなったが、以下では①②の武左衛門（桂堂）の「家譜」を中心に桂堂の職歴を紐解き、その家業について述べていくことにする。

## （2）高田藩「絵図書」増田武左衛門

まず、増田桂堂、すなわち高田藩士増田武左衛門（以下武左衛門と記す）について、分限帳にどのように記載されるか見ておこう。

天保15年（弘化元年〈1844〉）1月の日付がある「榊原様内越後頸城郡高田御家中高分限帳」では、増田武左衛門について「一、六石 絵図書 定番 増田武左衛門」と記載されている<sup>8</sup>。武左衛門（桂堂）の家督相続は天保3年（1832）だったので、この分限帳の記載は武左衛門（桂堂）自身のことである。禄高は6石（2人扶持の記載脱か）、注目すべきは「絵図

<sup>8</sup> 註6に同じ。

書」と「定番」の2つの役職が記載されていることである。この分限帳はいろは順に配列された分限帳で、各々の役職は右肩に記載される。武左衛門のように名前の上と右肩とに二つの役職が記載される例はほかにない。また「絵図書」の役職に就くものは武左衛門のほかに見られない。

他の分限帳ではどうか。同じ天保15年（1844）の「江戸高田分限帳」は役職ごとに編成される。ここでは武左衛門は「定番」として同役26人の一人として記載されている<sup>9</sup>。さらに文久2年（1862）「高田役禄帳」では、「絵図書」の項が起こされて「定番ニ而<sup>(ママ)</sup> 益田武左衛門」と「徒並ニ而/徒仮目付 富樫加左衛門」（/は割書きを表す、以下同じ）の2名が記載されると同時に、「定番」の項にも「一、六石式人扶持 家業/絵図書 増田武左衛門」が記載される。

高田藩の職制については研究が進んでいないが、「定番」については大坂定番や駿府定番のように江戸幕府の職制にも見られる番方の職である。高田藩の定番についても高田城や江戸藩邸の警備に当たる番方の職と考えてよいだろう。では、一見役方の職と見える「絵図書」と番方の役である「定番」とが組み合わせられるのはなぜか。つぎに武左衛門の「履歴」から考えていくことにしたい。

表は、先述の増田家家譜のうち、①と②の増田武左衛門（桂堂）の「家譜」2通からその履歴を書き出したものである。

天保3年（1832）の家督相続から慶応2年（1866）の第2次長州戦争終結までの履歴を一覧することができるが、まず目につくのは、「家譜」①に記載される「例年の通り御宝船絵認御用」を仰せつけられたという記事だろう。

宝船図は、室町時代にはすでに將軍家から一般にまで広く浸透していた習俗で、正月元旦か2日、あるいは節分の夜に枕の下に敷いて寝るとよい初夢が見られるとされたものである<sup>10</sup>。例年11月に武左衛門に対し作成の指示が出ていることから、正月に藩主が使用したものと考えられる。

「絵図書」である増田家の家業には、こうした一般的な絵画を描く絵師としての職務も含まれていたものと考えられるが、「御宝船絵」以外に目を向けると、武左衛門に命じられる業務は極めて行政的な性格を帯びている。例えば、天保7年（1836）には「国絵図」の作成を指示されており、弘化元年（1844）には「国絵図」の作成に出精したとして金200疋を下賜されている。この国絵図は、天保郷帳の作成に伴って幕府から国絵図の作成が指示されたものであり、高田藩にとっても重要な事業であった<sup>11</sup>。

<sup>9</sup> 「高田江戸分限帳」天保十五年（上越市公文書センター所蔵、上越市史専門委員会近世史部会編『上越市史叢書 史料集・高田の家臣団』上越市2000年、所収）

<sup>10</sup> 『国語大辞典』第9巻、「宝船」の項。

<sup>11</sup> 川村博忠『江戸幕府撰国絵図の研究』264頁（古今書院、1984年）によれば、天保郷帳・国絵図は一括して幕府勘定書で改訂されたものとされる。天保6年（1835）に始まり同9年（1838）に完了した国絵図の改定と武左衛門の国絵図作成を無関係と考えることはできないので、その関係については一考を要する。

表 増田武左衛門家譜記事一覧表

年号	西暦	月	日	記事	家譜
文政4	1821	12	26	謁見(初目見え)	②
天保3	1832	10	29	家督相続、家業未熟のため2石召上げられ、4石2人扶持下し置かれる	①②
天保3	1832	11	26	例年の通り、御宝船絵認め御用仰せつけられる	①
天保4	1833	4	25	父の名に付、武左衛門と改名願ひ	①
天保4	1833	11	19	例年の通り、御宝船絵認め御用仰せつけられる	①
天保5	1834	11	23	例年の通り、御宝船絵認め御用仰せつけられる	①
天保6	1835	11	19	例年の通り、御宝船絵認め御用仰せつけられる	①
天保7	1836	3	23	家業宜しく相成り候につき、2石ご返給	①
天保7	1836	6	20	国絵図認め御用仰せつけられる	①
天保7	1836	11	19	例年の通り、御宝船絵認め御用仰せつけられる	①
天保8	1837	1	23	御預所絵図認め御用仰せつけられる	①
天保9	1838	4	13	御巡見使御通行御道筋絵図仰せつけられる	①
天保9	1838	11	23	例年の通り、御宝船絵認め御用仰せつけられる	①
天保10	1838	8	21	家督相続御礼、御返給御礼	①
天保10	1839	9	19	佐渡御囲場所絵図認め御用仰せつけられる	①
天保10	1839	11	23	例年の通り、御宝船絵認め御用仰せつけられる	①
天保11	1840	11	19	例年の通り、御宝船絵認め御用仰せつけられる	①
天保12	1841	11	23	例年の通り、御宝船絵認め御用仰せつけられる	①
天保13	1842	8	23	海岸絵図認め御用仰せつけられる	①
天保13	1842	11	19	例年の通り、御宝船絵認め御用仰せつけられる	①
天保14	1843	11	26	例年の通り、御宝船絵認め御用仰せつけられる	①
天保14	1843	12	6	御武具製法之図認め御用仰せつけられる	①
弘化元	1844	1	9	御国絵図認め出精につき、金200疋下し置かれる	①
弘化元	1844	1	23	御武具製法之図認め御用仰せつけられる	①
弘化元	1844	11	12	例年の通り、御宝船絵認め御用仰せつけられる	①
弘化2	1845	12	1	例年の通り、御宝船絵認め御用仰せつけられる	①
弘化3	1846	11	13	例年の通り、御宝船絵認め御用仰せつけられる	①
弘化4	1845	11	24	例年の通り、御宝船絵認め御用仰せつけられる	①
嘉永元	1846	7	9	異国43か国人物図ならびに万国旗章之図認め御用仰せつけられる	①
嘉永元	1846	11	19	例年の通り、御宝船絵認め御用仰せつけられる	①
嘉永2	1847	5	19	御鉄砲御絵図認め御用仰せつけられる	①
嘉永2	1847	11	21	例年の通り、御宝船絵認め御用仰せつけられる	①
嘉永3	1848	5	27	海岸浅深御絵図認め御用仰せつけられる	①
嘉永6	1851	2	13	京都土御門御内鈴木図書方へ家業問合のため立ち返りの暇願	②
安政3	1856	10	12	今町表へ両度出役	②
元治元	1864	10	4	御進発御先手御供、御絵図書場にて仰せつけられる	②
慶応元	1865	5	4	再進発御前手附にて10月13日出立	②
慶応元	1865	閏5	2	大坂着	②
慶応2	1866	9	8	帰陣の際病中につき、中根善次郎隊について広島出立	②
慶応2	1866	9	20	大坂到着	②
慶応2	1866	10	4	大坂出立	②
慶応2	1866	10	26	高田帰着	②

註：家譜欄の①は嘉永3年提出増田武左衛門「家譜」、②は明治2年提出増田桂堂「家譜」を指す

また、天保8年（1837）には「御預所絵図」の作成が、天保9年（1838）には幕府巡見使の「御通行道筋絵図」の作成が、さらには天保10年（1839）の「佐渡御囲場所絵図」、天保13年（1842）の「海岸絵図」、嘉永3年（1850）には「海岸浅深御絵図」<sup>12</sup>の作成が武左衛門に指示されるなど、幕藩関係や海防などの藩政上重要な絵図の作成が武左衛門に対して命じられていることがわかる。

このように見てくると、武左衛門の家業である「絵図書」の職務の本質は文字通り藩政において必要不可欠な「絵図」の作成にあったと言えよう。

とはいえ、このような藩政上重要な絵図の作成は数年に一度程度のことであり、武左衛門は、平時は定番という番方の役職に身を置きながら、藩の指示に応じて藩政上重要な絵図の作成に勤しんでいたと理解できるだろう。

### 3 長州戦争と絵図書増田武左衛門

元治元年（1864）8月、高田藩榊原家は長州征討の幕命を受け、江戸へ藩兵を集めて出陣の準備を行ったが、翌年1月に出征は中止となった。しかし、慶応元年（1865）4月には再征の命が下った。第二次長州戦争の始まりである。高田藩は藩祖康政の先例を以て、彦根藩井伊家とともに旗本先鋒を命じられていた。

高田藩では、5月11日から諸隊が順次出発、13日には藩主榊原政敬の旗本隊が出発し、閏5月2日に大坂へ到着した。半年ほど大坂での滞陣を余儀なくされ、11月26日にようやく安芸国海田市へ向けて進発、海田市ではさらに半年近くの滞陣があり、ようやく安芸・岩国国境の小瀬川において戦端が開かれたのは高田を出発して1年以上が経過した5月14日のことだった。高田藩・彦根藩を含む幕府軍はこの緒戦に大敗を喫し、7月27日から8月7日にかけての安芸国宮内での戦いでも敗れることになる。こののち将軍家茂の喪が発表され、8月21日に朝廷によって休戦の調停が行われた。9月8日に広島を出発し、20日に大坂に到着、さらに高田に到着したのは10月20日のことだった<sup>13</sup>。

前掲表を見れば、増田武左衛門は第一次長州戦争において「御進発御先手御供、御絵図書場にて仰せつけられる」とあり、また第二次長州戦争では「再進発御前御手附にて10月13日出立」とあり、増田武左衛門もまたこの戦争に従軍していることがわかる。第一次長州戦争の際は、「御絵図書場」であったとし、第二次長州戦争では「御前御手附」、つまり藩主側に仕えたとする。このことは、「防州境小瀬川并芸州宮内村戦闘始末略記」に付属する従軍者名簿によって、武左衛門は旗本隊に「絵図書」として所属していることでも確認できる<sup>14</sup>。旗本、左備、右備、後備の4隊のうち「絵図書」が所属するのは旗本隊のみであり、それも増田武左衛門ただ一人であった。

<sup>12</sup> 「榊原文書」（高田図書館所蔵）中に「越後国頸城郡沿海浅深」と題した絵図が伝存する。

<sup>13</sup> 上越市史編さん委員会『上越市史』通史編4 近世二、198頁（上越市、2004年）

<sup>14</sup> 「防州境小瀬川并芸州宮内村戦闘始末略記」（高田図書館所蔵「榊原文書」、上越市史編さん委員会編『上越市史』別編6 藩政資料二〈上越市、1999年〉所収）



「増田桂堂資料」中に含まれる長州戦争関係の書状は3点。もう一点、「(安芸周防国境図)」があり、さらに「騎兵隊提灯図」も長州戦争関係と考えられるので、全部で5点となる。いずれも大量の絵画の下絵や模写、落款の模写の中に紛れていた。

ここではこのうち3通の書状に注目して、陣中の武左衛門の職務について考える。

時系列で紹介する。まず一通目（史料2）は正月23日付、旗本隊を率いた大老村上彦太郎から増田武左衛門に宛てた切継紙の書状である。

#### 史料2

（端裏上書）

増田武左衛門様 村上彦太郎

（本文）

申渡度候義候条、唯今 <sup>（平出）</sup> 御本陣へ可罷出候、以上

正月廿三日

正月23日、高田藩は安芸国海田市に滞陣中である。戦端が開かれる5月まではまだ間がある。旗本隊を率いるのは原田権左衛門と村上彦太郎の二人の大老であった。短い文面であるが、「申渡したいことがあるのですぐに御本陣までくるように」とする文面からは緊張が伝わる。藩士は長い滞陣に倦んでいたとされるが、呼び出された武左衛門には緊張する場面であったはずである。

次に2月14日の書状（史料3）である。右備を率いる大老中根善右衛門から武左衛門に宛てた切継紙の書状である。

#### 史料3

先日之長州委敷絵図之方、明日迄ニ早々一枚御認メ御廻し被成候様、尤急入用ニ付、其段相心得被成、御認メ御遣可被給候、以上

二月四日

増田武左衛門様 中根善次郎

史料2からそれほど日は経っていない。右備の大老中根善次郎から、先日の長州の詳しい絵図を明日までに急いで一枚仕上げしてほしいとの要求である。すでに武左衛門は長州国内の詳しい絵図を一枚仕上げている、それを見た中根は同じものをもう一枚仕上げてくださいという。正月23日に本陣に呼ばれた際、長州絵図の作成の指示を受けたものとも考えられる。陣中であって、戦場として想定される地域の絵図は極めて重要な資料であったはずである。間違いや虚構があってはならず、急いで作成する必要もあっただろう。絵図書としての武左衛門の職務は重責を負うものであり、芸州海田市における長期滞陣中であつたが、武左衛門の毎日は緊張に満ちたものであつたと推測できる。

最後に8月21日の日付を持つ書状（史料4）を見てみる。小納戸風間午之助・徒目付斎藤祖兵衛の2人から増田武左衛門に宛てたもので、武左衛門の肩書きに「御図書」と記されている。

#### 史料4

（端裏切封上書）

##### 御図書

増田武左衛門 風間午之助（小納戸）  
齋藤祖兵衛（徒目付）

（本文）

以手紙得御意候、然ハ此絵図面御写被 仰出候間、先日宮内絵図之通ニ而宜敷旨被 仰出候間、左様御承知可被成候、然は得御意如是御座候、以上

八月廿一日

この絵図面を写すよう指示があった、先日の宮内絵図の通りでよいとのことであるので、そのように承知せよ、との内容である。

この日は朝廷による休戦が成立する日である。高田藩の本陣にあっても休戦の情報は伝えられていたことと考えられる。写すよう指示された「此絵図」がどのような絵図なのか不明だが、この時期にあってもなお武左衛門に大きな負荷がかかっていることが知られる。

増田桂堂（武左衛門）の「家譜」②には、「御帰陣の節病中ニ付、中根善次郎殿御一手ニ付、九月八日芸州広島御出立」とあり、高田へ戻る9月上旬には武左衛門は病気であり、本来の所属である旗本隊から先発する右備中根隊に所属が移されていたことがわかる。八十治の「家譜」③にも、武左衛門の病気のことは記されており、八十治が高田から大坂まで迎えに行っていることがわかる。「絵図書」の重責を一人で負った武左衛門は、陣中の疲労も重なって病気を発症していた。

以上、断片的な史料ではあるが、これらの内容から、安芸国海田市滞陣中から小瀬川、宮内の戦いを経て、休戦に至るまでの期間、高田藩陣中において唯一人の絵図書、増田武左衛門が陣中で必要とされた絵図の作成を一手に引き受け、重い責任を負っていたことが明らかである。

#### おわりに

本稿では、新たに上越市立歴史博物館所蔵となった「増田桂堂資料」を中心に、絵師・画人として著名な増田桂堂の高田藩「絵図書」としての職歴と「絵図書」の職分を明らかにしてきた。

増田家の家業である「絵図書」は、平時は「国絵図」や「海防絵図」など行政上重要な絵図の作成を職務とし、陣中にあつては戦場となる地域の絵図作成を職務としていた。こうした職務は、領内統治や軍事行動などの大名権力の遂行に不可欠な職分である。

このような高田藩「絵図書」の職分は、一般的な御用絵師・お抱え絵師のイメージとは一線を画すようにも見えるが、幕府権力や大名権力のもとに包摂される本来の「絵師」の職分は、高田藩「絵図書」のように極めて行政的・軍事的な性格が強いものだったのではないだろうか。これによって、武左衛門が定番に配置されることも理解ができるように思われる。

一方で、幕府御用絵師や他藩の事例の比較・検討も必要であろう。今後の課題としておきたい。

最後に、本文中では触れなかった増田武左衛門と土御門家の関係について言及しておきたい。

嘉永6年（1853）2月17日、武左衛門は京都土御門御内鈴木図書方へ「家業問合のため立ち返り」の暇願いを出し、同月20日に出立し7月6日に帰着している<sup>15</sup>。土御門家は朝廷において暦術・陰陽道を司る家であり、このうち鈴木図書（星海）は土御門家司天台都講を勤めた天文家・漢学者である<sup>16</sup>。一見関係のないように見える「絵図書」の家業と土御門家との接点とは何か。

直江津今町の和算の大家として著名な小林百咄は土御門家門弟であったことが知られ、天保元年（1830）・天保6年（1835）には京都で天文、算学、測量、陰陽、暦術を修めたという<sup>17</sup>。増田武左衛門による「国絵図」や「海岸浅深御絵図」の作成には、当然のことながら高い精度が求められただろう。その際、測量に関する知識も求められたのではないだろうか。武左衛門の京都滞在は5か月ほどになるが、その間、暦術や測量を学んだと考えられるだろう。さらに「家譜」中の「立ち返り」という表現から、これ以前にすでに土御門家の門を叩いていたものと考えられるが、職歴には記載されないことから家督相続以前のこともかもしれない。だとすれば、暦術や測量の技術は、家業「絵図書」を相続するにあたって必修だったとも考えられそうである。

時代の変遷に伴い、「絵図書」に求められる技術も変化し、幕末における高田藩「絵図書」には、暦術や測量などの高度な専門技術も必要とされたと推測できるが、土御門家との関係も含めて、これも今後の課題としておきたい。

武左衛門は、明治3年（1870）9月に嫡子八十治に家督を譲り、同年10月には武左衛門から桂堂への改名を藩に届け、許可されている。藩への勤めを終えた武左衛門が、これからは「絵図書」でなく「絵師・画人」として生きていく、そう宣言しているように見えてならないが、「絵師増田桂堂」については本稿とは別の関心である。美術史の成果を期待することにしたい。

（上越市立歴史博物館 副館長）

<sup>15</sup> 「家譜」②（増田桂堂資料）

<sup>16</sup> 『国書人名辞典』第二卷（岩波書店、1995年）

<sup>17</sup> 上越市史編さん委員会『上越市史』通史編4 近世二、590頁（上越市、2004年）